ＴＩＣＯニュースレター　　２００７年１月発行

Face to Face

NO.11

特定非営利活動法人ＴＩＣＯ

あけましておめでとうございます。本年もTICOをよろしくお願い申し上げます！

ヒダノ修一・チャリティーコンサート決行！　ヒダノさんをＴＩＣＯ名誉会員に！

「ヒノダ修一」さんは、1998 年にザンビアにてＴＩＣＯ活動に出会ってから毎年継続的にザンビアの人々のために、チャリティーコンサートを開催して下さっています。そして、その過程では、音楽界をリードする方々をパートナーとしてステージにお迎え下さったなどＴＩＣＯとしても深く感謝しています。２００６年もヒダノさんは、ＴＩＣＯを通じてザンビア支援を行うために、横浜と徳島でチャリティーコンサートを開催してくださいました。横浜ではカトリック大船教会の皆さまのご支援をいただき、徳島では TICO 会員の多くのボランティアに支えられ、また、大塚ヴェガホールのご好意で会場を無償で提供いただき、コンサートは大盛況のうちに幕を閉じました。その徳島会場ではザンビアの警察官で徳島で防災について研修を続けているカチョファさんが冒頭で「ザンビアの人々を代表して日本の皆さん、そして徳島の皆さんに感謝します。」と挨拶がありました。コンサートの収益は主に、首都ルサカにあるンゴンベ貧困地区でＴＩＣＯの活動を 10 年以上やってきたザンビア人有志が運営するコミュニティースクールの増築のための資金として活用されることになっています。

多くの方々の善意で成り立っているＴＩＣＯ活動、事務局一同感謝申し上げます。そして、ヒダノさんはＴＩＣＯの名誉会員として今後もザンビア支援のために、未来の太鼓をたたきます。

横浜の強い助人（横浜市消防団・岩田祥三さん）

岩田さんは、自動車のプロ。ＴＩＣＯ事務局長の福士とは学生時代からの友人で、ＴＩＣＯに寄贈された車両や機材をザンビアへ輸送する際、岩田さんが経営する自動車会社がある横浜で点検、準備、梱包、船積み支援など、これまでにも多くの輸送関連支援をして来ました。横浜市消防局からも高規格救急車や資機材などをこれまでも継続的にザンビアのボランティア救急隊（ＥＲＴ）に寄贈してくれました。ＴＩＣＯの本部は徳島ですが、ＴＩＣＯファンが全国にいます。岩田さん、本当にありがとうございます。

ＴＩＣＯ（ティコ）は保健・医療・農村開発などの分野を中心にアフリカ・ザンビア共和国で支援活動を行っている NGO（非政府組織）です。世界の中の日本を考え、それぞれが自分にできる国際協力を実践していくために 1993 年に任意団体として設立、2004 年９月に特定非営利活動法人（ＮＰＯ法人）となり活動を続けています。

地球規模の問題に苦しむ人たちの自立支援を共同作業により実施し、そこで学んだ経験と知識を地域の人々と分かち合い、私たちの生活を振り返るとともに地域の精神文化の高揚に寄与することを目的としています。

TICO、宇宙人の会話を傍受し翻訳に成功。彼らは知能生物研究チームであった！？？

ＴＩＣＯ代表　吉田　修

＜会話全訳＞

「この美しい惑星｛地球｝に来るのは２００年ぶりだな。そのときのデータはあるか？」

「人類という知能生物が工業化を始めたところでした。かなり戦争好きの生物です。」

「よし、惑星診断装置を作動、解析しろ。」

ピ、ピ、ピ、

「データが出ました。人口が急激に増加し６３億。森林が３０％減少、空気の組成も変化しています。二酸化炭素濃度が上昇、気温も上昇中。化石燃料を大量に消費しているようです。ゴミを燃やしたり、埋めたり、山積みのまま放置されたところも多数。空中にも水中にも土壌にも、数万種類の自然に存在しない有害な化学物質が検出されます。人類以外の生物は２０％絶滅。各地に放射能反応あり、原子力発電と、おっと、何万発もの原爆を保有しています。」

「戦争好きもそこまで行ったか。ということは地球人という概念はなく、未だに国という単位で対立しているのか？」

「はい、今もあちこちで戦闘状態です。原爆を実戦で使用した形跡が２箇所あり。」

「なんと愚かな！」

「国ごとの、あるいは個人レベルでの格差が以前よりもずっと開いています。」

「何の格差だ？」「収入、教育、栄養、死亡率、寿命、全てです。」

「民主主義を実践している国があるか？」

「選挙はほとんどの国で行われていますが、個人が正しい情報を得て学習して政府を選択する我々のような民主主義はほんの数カ国です。」

「ん～！診断結果は？」

「９８％滅亡です。人類には長期的に未来を予見し、自己制御する能力が欠けているようです。」

「要するに今だけよければいいということか。それでどうする？救済するか？」

「いえ、何度か試みましたが、そのたびに神と呼ばれ宗教戦争を引き起こしました。この惑星の長い歴史から見れば知能生物種が一つ絶滅することは些細なことですし、他の生物にとっては好ましいことです。放っておきましょう」

「しかたない。」

もちろん宇宙人の会話を傍受というのは冗談ですが、内容は冗談ではありません。時には広い宇宙からの視点、長い地球の歴史からの視点でこれからのことを考えることが必要ではないでしょうか。案外、宇宙人は人類を観察して「まだまだ下等な知能しか持っていないな」などと話しているかもしれません。

TICO ザンビアスタディーツアーに参加して

中村　幸恵さん

私は、このスタディツアーに参加する前は、アフリカはとてもとても遠い国でした。そもそも、ザンビアという国が、アフリカのどこに位置して何語を話して、どんな暮らしをしているのかなんて、想像することもないような生活を毎日していました。ただ、前から興味はありました。海外でも、発展途上国に対して特に興味があり、アジア方面には、何度も行ったことがありました。どこの国でもそうですが、行く前と後とでは、その国に対する自分との距離が格段に変わってきます。だからこそ、一生のうちで一回は、アフリカのどの国でもいいから、行ってみたい。しかも、普通の観光だけではなく現地の人たちの暮らしを見たり、現地の子供たちと話したりしてみたい。それが、今回のスタディツアーに参加した一番の理由だったような気がします。

そんな単純な理由だったので、正直、ツアー中は多少、申し訳ない気持ちもありました。なぜなら、他の参加者やスタッフの方々の問題意識の高さや、熱心さ、と自分の参加動機との差があまりにも大きかったからです。ツアーの日程は、どれも充実していて、知識のない私にとっては、すべて新鮮であり、「ふーん。」と納得させられるものであったり、「へー。」と気づかされるものであったりしました。しかし、他の参加者のように、熱心にメモを取っていない自分や的を得た質問ができない自分に、少しばかり、劣等感を味わっていたような気もしていました。しかし、そんな私を元気にさせてくれたのは、この写真の子供たちです。これは、ツアー6 日目に行った、カルブエで出会った子供たちの写真です。

職業柄（日本では一応、小学校の教師をしています。）、やはり、子供たちを見ると黙ってはいられませんでした。英語ができないという劣等感さえ忘れ、とにかく、子供たちと話をしたり、歌を歌ったりすることに充実感を得られることができました。　特に、今回のツアー期間は、ザンビアでは冬休みということで、子供た

ちとのふれあいは、半ば諦めていましたが、思いもよらず、子供たちが集まって来てくれているという状況にとても感激し、アフリカの照り付ける太陽の下、一緒に歌ったり、踊ったり、ゲームをしたり、という時間は、私にとって、かけがえのない時間となりました。この時間を機に、私は私なりの意見で、背伸びをせず、このツアーに参加する意味を見つけていけるのだと思えました。

そんな私が、このツアーに参加して思ったことは、ＴＩＣＯの援助の基本となるWAHE（ワヘ）の中の‘E‘の部分にあたるＥＤＵＣＡＴＩＯＮ（教育）が、まだまだ他の３つに比べて不十分な気がする。ということです。もちろん、他の‘W‘の「水」や‘A‘「農業」、‘H‘の「健康」も必要なのも分かるし、今、行われているプロジェクトも現地の人にとって、とても助かっていることも目に見えて分かりました。でも、やっぱり、自分は、学校や子供のことにとても興味があり、特に、子供たちの姿を見ると「なんとかしてあげたい。」という気持ちになることに気づきました。とは言ったものの、私自身、ザンビアの現状を見て、学校や教師の少なさや施設の不十分さを間のあたりにしつつも、何からどうしたらいいのか全く、予想がたちませんでした。それほど、私が見たザンビアの抱えている問題が多すぎて、結局 10 日後には豊かな日本に帰ってしまう私の身分では口出しできない気持ちになってしまった、というのが本音のところです。

とにかく、ツアーを終え日本に帰ってきた今、私が思うことは、このカルブエに住んでいる子供たちが、継続的に教育が受けれるような学校と教師を配置してもらえるようなプロジェクトをたててもらい、私ができることは、それに必要な資金をできる範囲で援助することだなぁ・・・・。ということです。

日本で、なんとなく使っているお金。一杯の缶ジュースや、一食分の外食を我慢するだけで、私にパワーをくれた子供たちの笑顔が見れるのなら、私にとって、とても意味のあることになると思います。そして、自分がアフリカのことを十分に理解でき、その国のためにしていることに自信を持つことができたら、将来的には、自分以外のまわりの日本の人たちに、自分の思いを広げていけたら・・・と思っています。

最後になりましたが、このツアーを企画していただいたＴＩＣＯのスタッフの皆様、案内をしていただいた現地のスタッフの方々、そして一緒に参加できたメンバーのみんな、とてもすばらしい経験ができたこと、心から感謝いたしております。　ありがとうございました。

ザンビアのお巡りさん（カチョファさん）徳島で研修奮闘中！

ＴＩＣＯは徳島県国際協力パートナーシップ事業の支援を得て、ルサカで実施している救急救助隊のプロジェクトへ警察庁から出向しているカチョファ・ルイスさんの研修を受入れています。この研修では、徳島大学環境防災研究センター・岡部教授の指導を受け、また、徳島県警、吉野川警察署、徳島県危機管理局、ＪＰＲ（日本国際救急救助技術支援会）、神戸市消防学校、日本赤十字社徳島県支部などを通じ防災や市民の安全対策について学習しています。

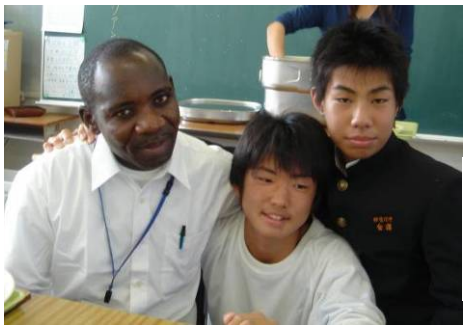
カチョファさんは、警察庁の警察官で主席警部（イギリス方式で警視と警部の間の階級）です。34歳の若手ですが、非常に真面目な方で、宗教心が強く母国では日曜日になると所属するキリストの教会でお話をするなど人々と交わることが好きです。

吉野川警察署では、いろいろご配慮をいただき、柔道訓練、パトカーの乗務体験、交通安全活動に参加させていただき、警察官の方々とも交流を深めています。また、県内の小中高校から講演の依頼も数多くきており、学生との交流も頻繁にこなしています。

滞在先の山川町では、「ザンビアは徳島から支援を受けているので、その恩返しをしたい。」と言い、町内にある山瀬小学校付近の子供の安全を守るスクールガード活動にも積極的に参加しており、研修で吸収するだけでなく、地域へ自分ができることでお返しをしているなど、地域でも有名なザンビアのお巡りさんとして知られるようになりました。

徳島県庁への表敬訪問

吉野川警察署での柔道訓練に参加



那賀川中学校の生徒さん達と。おいしい給食もいただいた。

WAHE プロジェクト通信

TICO　ザンビア事務所　西口三千恵

WAHE（ワヘ）とは？

Water(水)、Agriculture(農業)、Health(健康)、Education(教育)の領域をカバーしながら農村の生活水準向上を狙う TICO のプロジェクト。TICO は 2002 年ザンビア南部州にて飢餓緊急援助を行なったがそこで得た教訓とは「緊急援助の限界」と「飢餓をなくす為には農村に根本的対策が必要」との認識だった。いくつかの候補地から安全性や信頼できるパートナーの存在等の観点から支援地域をチペンビとカルブウェに決定した。

ザンビア共和国

日本人向け野菜販売、好調にもかかわらず事業縮小へ。

2006 年 1 月から開始した日本野菜の販売は、在留日本人の方々から好評を得、順調に売り上げを伸ばしている。なかでも、ごぼうや大根は品薄になるほどの売れ行きだ。しかし、現在は本事業を縮小させる方向で調整に入っている。なぜなら、日本人向け野菜販売は農園の事業として継続的に実施することが目的で導入されたわけではないからである。当時、カルブエ地域農園では収益が上がらずにメンバーも途方にくれていた。そこで自家用に野菜を栽培していた TICO 職員のアイデアで現地では販売していない日本野菜を栽培し、販売することで、農園事業に関わるメンバーのビジネスマインドを養うとともに、収入を実感してもらうことを目的として開始した。しかし、TICO 職員の日本人への野菜販売という支援がなければ成立しない現状は、この農園の自立発展を目的とする本事業の目的からやはり離れてしまうこととなる。

農園の銀行口座には共同菜園の野菜販売で上げた収益 2,000,000 クワチャ（日本円で６万７千円）が貯金されている。この時期を利用し、地域に還元できる農業に思考を転換していくべきではないかと考察している。日本野菜を購入してくださった在ザンビア邦人の皆様には深く感謝いたします。これからはザンビアの地域に直接還元できる農園を目指し、ザンビア人メンバー主導でザンビア人向けの農園事業へ焦点を移すこととなりますが、継続的に支援をいただけましたら幸いです。よろしくお願い申し上げます。個人的には枝豆だけは作りたいなあー、と考えたりします。冷えたモシを片手に・・・。

再び盗難・・・、試練の時。

農園にあるコンテナ倉庫から再度盗難被害が発生しました。前回の Face To Face では、倉庫の鍵が盗まれたという情報をお伝えしましたが、今回で３度目の盗難事件となり、被害額も増額しています。

皆様からの大切な寄付に基づいて実施している活動でありながら、盗難が起きるということを皆様にお伝えするのは本当に心苦しい限りです。しかし、これが現実であり皆様にも知っておいていただかなければならないと考えています。

被害状況は以下のとおりです。肥料、農薬、ホース、懐中電灯など約６万７千円に相当。警備員を配置していた夜間の出来事でした。なんと犯人はコンテナに詳しい農園メンバーと推測され、しかも過去に発生した盗難事件にも関与していた疑いがかけられていたメンバーでした。ここからが我々の想像を絶する行動ですが、数日後に開催された会議に平気な顔をして出席しています。その日のうちにヘッドマン（村の酋長）が警察へ連れて行き現在事情聴取を取っているところですが・・・。

盗難は TICO ザンビア開所当初から続いている頭痛の種です。首都ルサカにおいて実施していた母子栄養改善事業では、食糧援助ではなく食べ物の栽培をとおして自立発展的な事業の展開を期待していました。しかし、農作物が盗まれたため農園にフェンスをつけると、そのフェンスが盗まれました。盗難防止のため警備員を配置するために相当の支出を迫られました。共同の農機具を購入したら皆自宅に持って帰ってしまい

実際の農作業のときに使用できないということが起こりました。

援助関係施設が盗難被害に遭遇するという話は決して珍しい話ではありませんし、なかには盗難が発生することを見越して予算を計上する団体もあるほどです。しかし、日本のモラルを持つ我々が、いくら文化的な背景があると言っても盗難をそのまま見過ごすわけにはいきません。例えばザンビアで生活していると「借りたものを返さない」という事態によく直面します。日常的なペンなどの文房具からお金に至るまで、すべての「借りたもの」は自分の手に渡った時点で「自分のもの」になってしまうので「返す」という概念がなくなってしまうようです。これはザンビア人と日本人の間に発生する独特のものではないようです。ザンビア人同志の間にも存在するようです。しかし、そのとき、ザンビア人は「返してほしい」という要求はほとんどしません。「貸した」者と「借りた」者に上下の関係ができ、上に立つもの「貸した」方は慈悲でもって支援をしてあげる、という考え方になるそうです。アフリカでは部族ごとに王（キング）が存在し、王の慈悲によって平民は生活をしており、下のものが上のものに対してもつ依存心が生まれます。ですので「貸した」＝「あげた」ということになり、もう一方では「借りた」＝「もらった」ということになるようです。日常的な盗難はその延長にあり、「自分は持たない方だから持つ方からもらえばよいのだ」と言う発想です。黙ってもらってきてしまった、ということです。それが盗難という行動の根底にあるというのが現状です。しかし、ザンビア人が全て同様の思考と行動を取る訳ではなく、やはり今の社会では盗難は悪となっていますから、特定の人間に限った行動と言うことになります。社会の根底にある貧困だけが盗難の発生を引き起こしているわけではないのです。以上はあくまでも個人的な見解ですのでご了承くださいませ。

上記のことから、事業を実施する上で盗難予防をどうするのか、物品管理をどうするのか、ということは、農業や医療の技術移転をする前の基本的な事案として対応していかなければなりません。現地事務所では常にこのようなストレスにさらされているのが現状です。もちろん、かけがえの無い喜びや楽しみに遭遇することも多いですが、実は、このような悔しい思いをし、首をかしげながら盗難予防に費用を投じることもあるということを皆様にも知っていただきたかったのです。

以前 TICO はザンビア人に道徳を教える事業をやってみようかという案が出ていました。まだ実現はできていませんが、TICO の現地職員に対してはモラルの指導を継続的に実施しています。小さいところからですが少しずつモラルの認識が広がっていくことを願います。最近では日本のモラルも崩壊しつつあるようですが、国外に出ると、日本で幼少時から実施される道徳教育の重要性を認識する次第です。（K.I）

ルサカの首都を守る救急救助プロジェクト通信

TICO 事務局　　五十嵐　仁

ザンビアの首都ルサカ（人口約 200 万）の事故や急病に対応するシステムをＴＩＣＯとＪＰＲ（日本国際救急救助技術支援会：神戸）が本腰で作り始めてから ３年（ＴＩＣＯ単独では５年）になりました。2005 年には、３，７６１人の急病やけがをした人たちが救急車で病院や診療所まで搬送されました。

通信指令を行うＥＲＴボランティア隊員

この救急救助隊の活動は、非常にユニークと言えます。１つの団体だけでは首都ルサカを守ることはできません。そして救急隊の運用するための費用やそれに関わる人件費などを考えても１つの機関だけがその相当なる費用を負担することは不可能です。そこでこのような課題を克服するために多数の団体が１つのシステムの中に入り込み共同で救急活動をおこなっていますが、このことにユニークさを感じます。つまり、毎日が災害対応のように複数の機関の連携により日々の救急業務が行われているのです。日本ではまず考えら

ルサカ市消防本部警防課長バンダ氏

れない現状といえるでしょう。

さて、首都ルサカにＴＩＣＯとＪＰＲが作った救急隊の運用費用は実際どのぐらいなのかステップを踏みながら検証してみたいと思います。

ルサカの救急救助隊は、主に３つの機関が参加して運用されています。１つ目が地域の有志が参加しているボランティア救急隊（現地ではＥＲＴと呼ばれています。）２つ目は警察庁の救急救助隊（警察官が警察業務の１つとして参加しています。）そして３つ目がルサカ市消防本部です（消防官が消防業務の１つとして参加しています。）よって、３つの機関が協力して救急活動をすることで、各機関における費用負担を軽減する努力を*これまでやっていました。*

ロープを点検するＥＲＴボランティア

今回は、ボランティア救急隊であるＥＲＴにおける運用費用を検証してみたいと思います。３つの機関がルサカで救急業務を実施しているとは言っても、実際はこのＥＲＴが全ての参加機関を統括しているという状況があります。つまり、民間のボランティア機関が警察庁と市の消防本部の救急隊活動を取りまとめているということになります。なぜ、民間が官を統括できるのかは、ＴＩＣＯのこれまでの活動で救急行政を実施する人材をこのボランティア団体に育成してきた結果と言えます。そして、現地の政府や市民もこの成果を認めていて、このような民間ボランティア主導の救急活動が実施されているわけです。

ザンビア政府と言っても最貧国といわれているだけに、その財源は乏しく、公務員の給与が定期に支払われないという事態もしばしばあります。こうなると、救急隊の運用も結局ＥＲＴ（民間）に頼ることになってしまうという状況が発生しました。特に警察庁はほとんどの救急隊業務を実施するにあたり、警察官３名をＥＲＴに出向させることで日々の業務管理をＥＲＴに任せています。しかし、警察庁からそのための予算が提供されるわけではありません。

ＥＲＴはこの負担を賄うために、診療所や一般の家庭から大学病院までの転院搬送においては、その経費の一部を利用者に負担してもらうために、１回の搬送で約 500 円の支払いをお願いしています。この転院搬送から入る収益は月平均して 49,000 円程度です。さらに、現地警備会社がスポンサーとなり、月 71000 円の支援がありましたので、おおよそ月額で 11 万円程度の収入で首都人口 200 万を守る救急救助隊活動を運用してきたことになります。

さて、支出ですがまだ本年の 12 月分のデータが出ていないため参考としてみる必要がありますが、ほとんどの出費が救急車や救助車の燃料代です。その他、ボランティア救急隊員の交通費実費と 12 時間勤務に対し１回の給食を提供するのでその費用です。さらには、定期的な車両の修理点検、隊員の被服費、電気、水道代などで収益が全て消化されていました。

ところが、本年の６月になって急にスポンサーとして支援をしてくれいた警備会社の経営が悪化して、月 71000 円の寄付が止まってしまったのです。ＥＲＴ救急救助隊の運営費の約７割に対する支援が止まったということは、ＥＲＴボランティア隊は運営そのものができなくなるということです。ＥＲＴの運営委員会は、決断をしました。ボランティア隊員へ支給していた交通費、給食費、被服費を全て止めたのです。当然、それではボランティア隊員も続けることができません。本年初旬にいたボランティア隊員 28 名（登録訓練済）が 15 名に減りました。無理もありません。しかし、ＥＲＴ運営委員長のアンドレア氏は「苦しいけれど、通報があれば市民の命を守るために出動して行くしかない。断ることはできない。だから私たち管理者を含むボランティア隊員にがんばってもらうしかない。事実残った隊員はザンビアの中でも選抜され人のために働きたいという心を持つ人間です。」と発言していました。当然ながら、運用費は不足していますので、ＥＲＴボランティア隊は政府へも打診しています。何とか打開しようと必死です。現在は、電気・水道代も支払うことができずＴＩＣＯのザンビア事務所から支援を得て当面免除されています。

出動の準備をするＥＲＴボランティア

このような瀕死の金欠状態にありますが、転院搬送から入る収益だけで救急隊を動かしています。ＴＩＣＯやＪＰＲはこの苦難を打開するために支援をしたいのですが、そこをぐっとこらえています。つまり、現地の人たちだけで運用が可能な形で落ち着く必要があります。そしてその形というものが、今後ザンビアの

社会環境でも運用され続ける持続的なモデルであると思っているからです。

これと同時にもっともっと政府の関与を強めることができるようにするため、ＴＩＣＯは徳島県の支援の下、ザンビア警察庁からＥＲＴに出向している救急隊の警察側の責任者であるカチョファさんを徳島に招聘し、防災にかかる研修を２００６年 10 月から来年 3 月まで実施しています。そしてＪＰＲは同様に神戸市の支援の下、ＥＲＴ運営委員会の副委員長のマーティンさんを招聘して神戸市消防学校で同様に短期集中研修を受ける機会を作っていただきました。

ザンビアで不足していた防災の中堅職員の育成を通じて、ザンビア人自身でザンビアの人々を救うシステムをこれからも自分たちの手で作り上げていけるように支援を継続しています。「魚を差し出すのでは無く、魚の釣り方を教え自分たちで収穫を得られるようにする」支援をＴＩＣＯでは心がけています。引き続きご支援のほどよろしくお願いします。

ＪＰＲが２００６年１１月にザンビアで実施した特別訓練の様子は次号にて詳しく紹介します。

ショートリポート　農村地区の教育現場の現状

TICO 事務局　五十嵐　久美子

今回、短期間ではありましたが、沢山の教育現場を視察する機会を得ました。ザンビアではどこの地域でも公立学校の数はまったく足りていません。政府は無償で教育の機会を提供する！と宣言はしたものの、教師の給料を払うのさえままならず、学校建設などもってのほか、既存の学校の修繕や資材の補充などもまったく追いついていない現状がありました。多くの学校は３部制で、同じ教室を３つの違う学年が使用することによって、なんとか多くの子供達が授業を受けられるように工夫しています。しかし、この制度も結局は１日に３時間ほどしか学校で勉強できないこととなり、教育の質を考えると本当にまだまだ改善しなければならないことが沢山あります。また、子供達は平均１時間から２時間かけて学校までの道を歩きます。農繁期には農作業の手伝いもあり学校に行けないときもあるそうです。

公立学校の他に私立学校もありますがもちろんお金がかかりますし、大きな街にしかありません。他には「コミュニティースクール」といって、地域住民が中心になって学校建設から教師の手配まで実施することも可能な学校の形態もあります。視察を通して強く感じたことは、村のリーダーとなる人の意識によって子供の教育の機会は大きく左右されるのだということです。「学校は政府が提供するものなのでどんなに遠くても子供は歩いていくしかない」、と言って、政府の支援をただひたすら待ち続けるのか、それとも、「子供達への教育は村の将来にも非常に重要で自分達でできるところからはじめよう」と考え行動するのか。ヘッドマン（村の酋長）をトップにしたヒエラルキーによって成り立つ農村社会では、村のリーダーとなる人材がどう考え行動するのかが非常に大きい要因となるでしょう。

▲カレセ村にあるコミュニティースクールに集まった生徒と PTA。後ろにある小屋が教室。一部屋根が崩れ落ちているため雨の日は休校となる。

TICO も WAHE の観点から、教育分野での支援を視野に入れています。幸いなことに教育支援に理解を示してくださる TICO 支援者の方も沢山おられ、寄付金が集まりつつあります。現場を目の当たりにすると、あまりにもやるべきことが多すぎて何から手をつけてよいか悩む一方、全てのことに支援ができないだろうかと考えてしまいます。あせらず、ひとつひとつ、できるところから支援を始めていきたいと思います。ザンビアでよく聞く言葉があります。***「Knowledge is power　(知識は力なり)」***この地ではこの言葉の重みをずっしりと感じます。

▲　カルブエ地区にあるコミュニティースクール。宗教団体の支援を受けて校舎が建設された。２つの教室があるが先生は１名のみ。

▲カピラ村にある公立小学校。机と椅子が足りず床に座って授業を受ける生徒もいる。

ＴＩＣＯ道場「ユース合宿」、始動！

TICO ではこれまでの国際保健活動の経験を踏まえ、次世代を担う人材育成を目的に「ユース合宿」と称して、地球規模の課題を考える講座をスタートさせました。今期は２グループを迎え、それぞれのグループからの要望に沿う形でプログラムを作成しました。講師のほとんどは海外経験豊富な TICO のスタッフです。時には、大学の先生も講師にお迎えします。参加者は国際協力や環境問題に興味を持つ大学生がほとんどですが、なんだか楽しそう！という理由だけで参加した人も、合宿の最後にはしっかりと自分にできることを探して帰っていきます。こちらの期待もさることながら、参加者の期待もそれはそれは大きく、開催前から何度となくメールの交換をし、準備を整えます。この合宿を通して「TICO ユース」のアイデアも出てきました。（関連記事１０ページにあり）これからさらにバージョンアップして参加者の希望に沿った合宿ができるようアレンジしていきます。興味のある方は TICO 事務局までご連絡を！

この夜「四国ユースネットワーク」が結成された！

① 四国ユース

四国内で活動する大学生を中心に、国際協力入門講座３泊４日で実施。四国４県から総勢 12 名が TICO 道場に集まった。四国 NGO ネットワークの管理団体である「えひめグローバルネットワーク」、高松にベースを持つ「セカンドハンド」の学生部会「小指会」、高知医科大医学生による「僻地医療を考える会」などですでに活動を実施している人も多く、ボランティア未経験という人も他のメンバーにかなり刺激を受け、参加者同士の学びは大きかったようだ。また「四国ユースネットワーク」立ち上げのために夜遅くまで協議され、合宿終了直後には情報交換のためのブログも立ち上げられた。特別ゲストとして青年海外協力隊でマラウイ共和国において活動をされていた山田耕平氏が登場（関連記事あり）。アフリカのエイズの現状についてリアルなお話が聞けた。

ＴＩＣＯからは現場経験が豊富なスタッフが入れ替わり立ち代り内容の濃い講義を行った。ゲームを通して世界経済の仕組みを理解したり、宇宙船に乗って地球から脱出する際の持ち物リストを書くことによって、宇宙船は閉ざされた空間と思っていたのに、実は今住んでいる地球と同じ状況だということに気づかされた。

② 国際医学生連盟（日本支部）（IFMSA）

全国各地から 5 名の医学生、看護学生が参加。今回は IFMSA の方から「アフリカンビレッジプロジェクト」と称して、TICO の活動サイト（ザンビア）で調査事業を実施したいという申し出があり、行くからには準備が必要と言うことで今回の合宿の運びとなった。
一般的な国際保健に関わる知識から、実際の調査計画準備と 1 泊 2 日と短期間ではあったが内容の濃い時間を過ごした。2007 年 3 月に調査のためにメンバーはザンビアへ渡航する予定。その前に再度調査計画のための合宿が２００７年２月に行われる。　（Ｋ．Ｉ）

マラウイの国民的アイドル山田耕平氏、ユース合宿にゲスト参加！

アフリカの中でも HIV 感染率がもっとも高いと言われているマラウイ共和国において、青年海外協力隊として村落開発の活動の傍ら、エイズ予防啓蒙のための歌を作詞。その曲が全マラウイヒットチャート第１位を占め、一躍「時の人」となったのである。歌詞は、「愛する人を守るためカップルカウンセリングに行く二人。HIV 感染陽性と判定された彼氏は彼女に別れを切り出す。しかし、二人の愛はその障害を乗り越えようと固く結ばれる。」と言う内容。もちろん全てマラウイの現地語であるチェワ語で歌われている。同じ青年海外協力隊の友人の協力もあり DVD も完成。マラウイ人演じるカップルは当地の友人を思わせ胸が詰まる。アフリカのエイズの現状は世界ビジネスの格好の獲物となり、治療もケアも不足だらけである。そんな中、山田氏の DVD つき CD が日本国内でも販売開始となった。遠いアフリカの友人に思いを馳せる人が増えるきっかけを作ったことは間違いない。先日 12 月 1 日は世界エイズデーとして日本でもさまざまなイベントが開催された。しかし、日常的にエイズについて語られることは少ない。先進国の中でも唯一 HIV 感染者数が増加を続ける日本にとってエイズはもう他人事ではないのだ。

（Ｋ．Ｉ）

ＴＩＣＯ版出前講座・国際理解教育で地域の学校と繋がっています！

那賀川中学校で実施している人権教育の一環として、学校からの依頼を受け「アフリカで生きる」と題して３年生約１００名を対象に講演を行いました。アフリカと聞いてほとんどの学生さんが想像することは野生動物でした。自然が多く残されるアフリカの野生動物や国立公園の映像はテレビでよく放映されています。しかし、そこに住む人々の生活はほとんど知られていません。内戦で手足をなくした子供、毎日１０キロの道を水汲みに通う少女達、医療設備も整わず下痢や風邪で死んでしまう子供達・・・。しかし写真の子供達は笑っている、それが現実です。話を聞くだけではなく実際に、６人の学生に６人家族の設定でロールプレイに参加してもらい、学校に行けないことや食べ物を分け合うことの大変さを実感してもらいました。「自分達にできること」をこれから考えていくことが課題だということに多くの方が気づいてくれたようです。以下に学生の感想文の抜粋を掲載いたします。ＴＩＣＯではこのように国際協力により得た経験を地元の学校教育の現場で生かすことにより、地球規模の課題に思いをはせることができる人づくりのお手伝いをしています。「国際協力は国内にいてもできる」

ロールプレイに参加する学生さんたち。

というのがＴＩＣＯの考え方です。今までにもＴＩＣＯの授業を受けた方たちは、アフリカで困難に立ち向かい生きる子供達の写真から生きる希望を感じ取っています。また、自ら募金活動をしたり環境問題の研究に取り組んだりと、行動に移すことができています。ご興味をお持ちの教育関係者、地域支援グループの方など、ご連絡をいただけましたらテーマにあった内容のお話をご用意いたします。まずはご連絡を！（国内事業部コーディネーター・五十嵐久美子）

講演を聴いた学生さんの感想文より抜粋

- もっとよく知りたいなぁと思った。もっと貧富の差が小さくなればと思う。「吉野川の環境を守ることは、ザンビアの環境を守るのと同じ」と言っていて、ちょっとどきっとした。
- 現実が過酷すぎると思った。まだ義務教育も終わっていないような歳なのに働いていて、食べ物も満足に食べられなくて、見ていて悲しくなりました。同じ地球にいる人間なのに、日本にいる私は働いてもいないのに、食べ物は好きなように食べるし、勉強もしている。なのにザンビアにいる彼女達は必死で働いて１３０円、食事ができれば幸せ。学校も行けない…。この違いは本当にどこから生まれてくるのでしょうか。今、私がこうして感想を書いているときにも、彼女達は５ｋｍの道のりを歩いているかもしれないし、働いているかもしれないし、お腹をすかせているかもしれません。五十嵐さんは、私たちにもできることがあるとおっしゃっていました。だから、そのできることは何かみんなで考えて行きたいと思いました。
- 今日は、話を聞けてよかったです。ザンビアでは水も十分ではなく、私がいつも使っている水のごく少しの水で家族６人が生活していて、もっと水を大切にしなければいけないと思いました。５才の誕生日を迎えるのは当たり前だ、と思っていたけれど、そうではないということも話を聞いていて身にしみてきました。自分たちの生活は当たり前ではなく、とても恵まれていることに気がつきました。
- 今日話を聞いてみてよく分かりました。いろんな事をして役に立ってみたいなぁーと思いました。アフリカでの生活はいろいろあるのに、あんなに笑ってすごせるんや、すごいと思いました。毎日、一生懸命生きてすごいって思った。もっとみんなー生懸命生きるべきと思った。

TICOユース設立へ向けて

徳島大学　庄野真代

「徳島から、若者から、グローバルな輪を世界中に広げたい！もっとみんなで一緒に世界のことを考えたい！」２００７年１月の「TICOユース」設立に向けて、そんな想いで今とてもわくわくしています。

TICO ユース設立のきっかけは、２００６年９月に「地球家族の家」で行われた四国ユース合宿でした。医療、環境、食など様々な分野に興味を持つ大学生が四国４県から集まり、TICOスタッフ指導のもとアフリカの現状やボランティアの意味、そして循環型社会のたいせつさなどを学びました。この合宿を通して「国際協力は足もとからできる」と痛感し、自己を見つめなおすことが出来ました。また同時に多くの仲間たちと共に様々なことを学び、考え、行動したいと強く感じるようになったのです。

この合宿での出会いがきっかけとなり、徳島の学生を中心にTICOユースは動き出し、３ヶ月で仲間も徐々に増えていきました。「地球規模で考え、地域で行動しよう！」という私たちの想いは日々膨らみ、広い視野を持ち地球のことを考える作業はとても楽しく、新たな発見の連続です。

設立準備中である現在は、勉強会やチャリティーイベントの開催を計画しています。他にも環境に関すること、食に関することなど、私たちのやりたい案は尽きることがありません。社会に若者の声を伝え、そして徳島から世界へその声を広げていくこと。ここにユースが活動することの意味があると私は考えます。

最後になりますが、がんばってゆきます。みなさまご指導よろしくお願いします。

地球人カレッジ報告

スタディーツアー帰国報告　（１０月１６日）

８ 月に実施されたザンビアへのスタディーツアーに参加したＴＩＣＯ会員の寺口美香さんと中村幸恵さんより現地で見て、聞いて、感じたことを報告していただきました。また現地より一時帰国をしていたザンビア駐在員の西口はスタディーツアー現地案内役として参加した経験を話しました。百聞は一見にしかず、ということをひしひしと感じた報告でした。

次回の地球人カレッジは
2007年1月27日(土)です。
（19:30～　さくら診療所にて）

また、18 時からは「*TICO ユース・発足記念式典*」を開催します。会員、非会員を問わず皆様のご参加をお待ちしています。若い力への応援、よろしくお願いします！！

ザンビア人によるザンビア人の命を守るプロジェクト　（12月16日）

ＴＩＣＯが支援している救急プロジェクトの委員会副委員長のシムウィンガ氏が、神戸市の助成金を受けて ３ 週間の研修を受けるために来日していました。徳島で研修を受けているカチョファ氏と共に、現地での活動報告と抱えている課題と抱負について語っていただきました。ＴＩＣＯからの資金援助が終了した現在も委員会が中心となって持続可能な管理体制の模索をしている様子が伝わってきました。

新生ＴＩＣＯ本部事務局体制

ＴＩＣＯも２００６年１１月で国際協力活動の１３年目を迎えました。会員の皆様方のご支援の賜物です。今後TICO は国際協力の現場での活動を拡大し、アフリカだけではなくアジア諸国でも活動の拠点を模索していく予定です。また、国内活動の拡充を計画しています。特に、次世代を担う人材育成と地域での社会貢献活動にも力を入れる予定です。これらの活動を支えているのがボランティアスタッフです。そして、ＴＩＣＯ会員の有志です。今後ともご支援・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

代表	：	吉田修
事務局長	：	福士庸二
国内事業部コーディネーター	：	五十嵐久美子
海外事業部コーディネーター	：	五十嵐仁
会計担当	：	中野貴志
調査・研究事業担当	：	渡部豪
緊急支援事業担当	：	田渕俊次
農村基礎保健事業マネージャー	：	田淵幸一郎
国内研修事業担当	：	田淵千夏
ザンビア事務所代表	：	西口三千恵

TICO 国内活動（2006 年１０月１日～１２月２１日）

＜２００６年１０月＞

１日　国際医学生連盟・ＴＩＣＯ国際協力合宿（９月 30 日から）
３日　山瀬小学校「ボランティア講座」（五十嵐夫妻）
４日　人権教育協議会研修会・講演（五十嵐久美子）
５日　山川中学校ボランティア部の募金活動に対しＴＩＣＯから感謝状が贈られる
６日　松茂中学校国際理解講座　講師派遣（五十嵐仁）
７日　研修員カチョファさん来日（ザンビアから）
９日　ヒダノ修ーチャリティーコンサート in 大船教会（吉田代表、福士事務局長）
１１日～１３日　国際保健医療学会参加（五十嵐久美子）
１１日　TICO ミーティング
１３日　松茂中学校国際理解講座　講師派遣（吉田代表）
１４日　「災害時サポーター育成・医療通訳制度」説明会に参加（五十嵐仁）
１７日　那珂川中学校「国際理解講座」講師派遣（五十嵐仁・久美子・カチョファ氏）
２０日　松茂中学校国際理解講座　講師派遣（福士事務局長）ＡＭＤＡ菅波代表、ＪＰＲ正井会長、ＴＩＣＯ吉田代表による３者会談の実施（岡山）
１８日　徳島県民プラザ主催 NPO フェアに参加

NPO フェア会場にて民族衣装に身を包む TICO 会員

２８日　地球人カレッジ「スタディツアーからの報告」
28 日～　五十嵐仁・久美子ザンビア出張（12 月２日まで）
３１日　徳島県表敬訪問（福士事務局長、カチョファ氏）

＜２００６年１１月＞

5日　赤十字秋季学習会講師派遣（西口、カチョファ氏）
6日　ＪＩＣＡザンビア事務所菊池職員ＴＩＣＯ事務局訪問
７日　木屋平中国際理解講座講師派遣（吉田代表・カチョファ氏･西口・）
８日　ＴＩＣＯミーティング
11 日　NPO 広報講座～「伝える」から「伝わる」へ（中野）
１２日　木屋平「わらびの会」主催ゆず狩り

凄い量のゆずです！みなさまご苦労様でした！

２２日　ＴＩＣＯミーティング
２３日　ＴＩＣＯユース設立委員会ミーティング
ＴＩＣＯ設立記念日パーティー
２６日　ヒダノ修ーチャリティーコンサート in 徳島
２８日　横浜市立鶴見中学校にてＴＩＣＯ活動報告（西口）

＜2006年12月＞

１日　香川大学国際協力論で講演（吉田代表）
２日　五十嵐　仁・久美子ザンビアより帰国
３日　西口ザンビア事務所駐在代表ルサカへ帰任
５日　木屋平中学校国際理解講座　講師派遣（吉田代表）
６日　わらびの会（木屋平）と懇親会
８日　北島中学校にて国際理解講座（吉田代表・福士事務局長・五十嵐久美子）
１４日　文理大学国際理解講座にて講演（吉田代表）
１６日　地球人カレッジ
２０日　ＴＩＣＯミーティング
２１日　鴨島商業高校にて「アフリカの現状とエイズ」講演（吉田代表）
北島中学校国際理解講座へ講師派遣　（吉田代表・福士事務局長・五十嵐久美子）

ありがとうございました（敬称略）

★寄付をくださった方々★

今関知良　ヨネダキヨミ　徳島県高等学校人権教育研究協議会・中部支部主事会研修会に参加した協議会メンバー　国際医学生連盟　高木クニ子　阿波西高等学校　田中純子　橋本伸子　大船教会　西尾正己　寺口美香　江口貴雄　桐田泰江　渡部豪　今井公子　木屋平中学校　森和雄　太陽と緑の会　ヒダノ修一　金子征一　小野裕次　鶴見中学校　水野菊江　森マサエ　横田久子　唐住洲子　美馬文子　城西高校　徳島県海外教育研究会　江橋裕人　五十嵐仁・久美子

★会費を継続して払ってくださった方々★

井内誉範・晴子　井口千春　遠藤千鶴　鏡登志子　梯真由美　久保真一　篠原幸隆　武市秀男　茶畑勝博　中谷加奈子　中村美恵子　松田恵美子　峰尾武　渡部豪　中野貴志　東條昭子　能田千春　長地孝夫　檜みどり

★新たに会員になってくださった方々★

木村　中村幸恵　神谷保彦　小野裕次　森和雄　庄司孝志　（以上は２００６年９月２６日から１２１８日までの事務局入金分：順不同）

※お名前を非公開にされたい場合はＴＩＣＯまでご連絡ください。

【TICO への入会方法】

会員となって資金面から TICO の活動をサポートしてくださる方を募集しています。入会ご希望の方は郵便振替用紙に所定の年会費を納入して下さい。インターネットの TICO ホームページからも入会申し込みが可能です。会員の方には TICO ニュースレター『Face to Face』を毎号送付いたします。

【正会員】　12,000 円

【賛助会員】　個人：12,000 円　学生：6,000 円
団体：15,000 円

（通常は賛助会員でのご入会をお願いしています。総会での議決権を持つ正会員を希望される方は事前にご連絡下さい）

振込先：郵便振替口座　０１６４０－６－３７６４９

振込先加入者名：TICO

Ｅメールアドレスをお知らせいただいた方にはＴＩＣＯの各種イベント情報をメールにてご連絡申し上げます。

ＴＩＣＯの活動は皆様からの会費やご寄付によって支えられています。会費の納入がお済みでない会員の方は、納入下さいますようお願いします。なお、郵便口座からの「年会費自動引き落とし」もご利用いただけます。事務作業軽減のためにも、ご協力お願いいたします。

速報！

書き損じはがき DE 国際協力！キャンペーン

年賀状を書き終わったら･･･宛先などを間違えた「書き損じはがき」や余ったはがきを是非ザンビアの子供たちのために送ってください！

送付方法：　枚数は何枚でも結構です。送料は自己負担でお願いします。
可能でしたら、郵便局で切手に交換してから送付していただけると助かります。

注意：　次のはがきは切手に交換できないため、送付はご遠慮ください。
- 切手の貼っていない私製はがき
- 額面部分が汚れているはがき
- 宛先不明で返送されたはがき 配達済でも消印が押されなかった年賀状

その他：　書き損じはがきのほか、次のようなものの寄付も随時受け付けています。
- 未使用切手・はがき・テレホンカード
- 商品券、図書券、文具券などの金券

宛先　：　TICO　はがきキャンペーン係
〒779-3403　徳島県吉野川市山川町前川２１２-６

募金のお願い

TICOのザンビア支援活動は皆様からの寄付金や会費により支えられています
（事務局の作業軽減のため領収書は発行していません。必要な方はお申し出下さい）

郵便振替口座：０１６４０-６-３７６４９　振込先加入者名：ＴＩＣＯ

四国銀行 山川支店（店番号３４４）普通預金 ０１９９６９２

特定非営利活動法人ＴＩＣＯ 代表理事 吉田修（トクヒ テイコ）

TICO ニュースレター Face to Face 第１１号　2007年１月発行　　発行人：吉田　修　　編集担当：五十嵐　久美子

【TICO 事務局連絡先】
〒779-3403　徳島県吉野川市山川町前川 212-6　電話：090-7786－3193　/　FAX：0883－42－5527
TICO ホームページ：http://www.tico.or.jp/　　e-mail：zikomo@nmt.ne.jp